

[活動年度] 2015 年度 - 2016 年度

日本語 OPI 研究会の広がり求めて

辻 和子 (2015-2016 会長)

1. はじめに

2015 年、日本語 OPI 研究会が発足 35 年を迎えました。私は 2005 年に OPI についてもっと知りたいと思い研究会に入会し、10 年を過ごしたところで、会長を担当することになりました。入会した当初は、研究会で取り上げられる話題やその議論が新鮮で、話し合いになんとかついていきたいと夢中の時間を過ごしました。諸先輩の暖かい助けがあり、貴重な出会いがあり、OPI の理解を深める一方で、人間関係も大きく広げることができました。そして、日本語 OPI 研究会の魅力は、OPI そのものだけでなく、OPI に関わる人たちのつながりにあると思うようになりました。そこで、2015 年度、2016 年度は、改めて会員にとって魅力ある研究会とは何かを考え、ぜひ定例会に出席したいと思うような魅力ある研究会にしていくことを目標としました。

2. 外への広がり求めて

運営委員会で 2015 年度、2016 年度の運営について話し合う中で、魅力ある研究会の一つの要素として、OPI を取り巻く言語教育の話題への知見を広げる、あるいは、OPI を広げていくといった、「外との関わり」「外への広がり」が必要ではないかということになりました。そこで、2015 年度、2016 年度の活動の中で、日本語 OPI 研究会主催および共催のセミナー等を行って、内部外部に向けて情報発信していく機会をもつことにしました。

2.1 第 10 回国際 OPI シンポジウム (於：函館) 共催 (2015 年 7 月 31 日～8 月 2 日)

前年度に、(財)北海道国際交流センター、日本語プロフィシエンシー研究会、九州 OPI 研究会、韓国 OPI 研究会とともに第 10 回国際 OPI シンポジウムを開催することが決定されました。それを引き継ぎ、開催に向けて 2015 年度の活動開始時より他研究会と連絡を取り合い、開催当日は会員有志が運営にあたりました。

シンポジウムは「多様なつながりと OPI」をテーマに、国内外の日本語教育実践者、研究者が大勢集まり、OPI を取り巻くホットな話題について大変活発に意見交換が行われました。他研究会との連携、講演者の方々との出会いは、シンポジウムのテーマと併せて、その後の日本語 OPI 研究会の広がりを検討する上で、大変貴重な機

会になりました。

2.2 勉強会・ワークショップ開催

OPIの最新情報と理解を深めるために、まずは研究会の会員向けに、講師を招いて勉強会およびワークショップを開催することにしました。さらに、研究会の内外に向けて講演会を開催することを考えました。

2.2.1 日本語 OPI 研究会第 1 回勉強会 2016 年度第 1 回ワークショップ(2016 年 5 月 28 日)「ACTFL プロフィシエンシーアセスメントの現在と将来の展望」講師：三浦謙一氏 (ACTFL 日本語トレーナー)

第 10 回国際 OPI シンポジウムの際のご縁をもとに、三浦 ACTFL 日本語トレーナーに研究会会員向けに勉強会を開いていただきました。

勉強会では、①2012 年版ガイドラインで示された卓越級 ②Writing Proficiency Test(WPT) ③日本語の OPIc® ④OPI の将来の展望と日本語版が開発されるであろう LPT (Listening Proficiency Test)、RPT (Reading Proficiency Test) について説明が行われました。

2.2.2 2016 年度第 2 回ワークショップ「日本語話者の発話に関する評価を考えるワークショップ」(2016 年 7 月 2 日)講師：一般社団法人アクラス日本語教育研究所 嶋田和子トレーナー

日本語話者の発話のスキプトを読んで評価して、結果について話し合うというワークが実施され、書き起こしたスキプトを利用して判定を行う場合に発話であることを意識しないと判定が変わる可能性があることが示されました。また、日本語教師の評価とそうでない人の評価に差があることから、評価の観点に関する指摘がなされました。

2.2.3 日本語 OPI 研究会第 2 回勉強会 2016 年度第 3 回ワークショップ(2017 年 1 月 8 日)「パフォーマンス評価再考：Good Writing 評価を通して」講師：田中真理氏 (名古屋外国語大学)、阿部新氏 (東京外国語大学)

パフォーマンス評価としてのライティング評価についての話し合いと、実際のライティング評価活動が行われました。さらに、WPT と OPI と比較し、WPT が OPI に準拠していることが確認されました。

2.3 OPI テスト準備委員会と OPI c-J

日本における日本語 OPI テストの実施を目指して、2009 年度に実施されたパイロ

ットテストをもとに、2015年度、2016年度も埴委員長が中心になって、日本におけるLTIの総代理店であるNECマネジメントパートナーシップ社(=NECMP社)との交渉が続けられました。

2015年度には同社から日本語OPIcテストの実施可能性について調査協力の依頼がありました。将来日本語OPIcに続いて日本語OPIテスト実施の可能性も期待されることから、研究会として依頼を受け入れて、候補団体を募集して協力することになりました。2016年度に2つの大学において試行テストが実施されました。

しかし、2016年10月に同社の総代理店の権限が一般社団法人Global8に移行されたことから、2017年度は同法人と交渉を続けることになりました。

3. 定例会活動

2015年度は第88回～第90回定例会、2016年度は第91回～第93回定例会が実施され、ニューズレター66号～68号が出されました。定例会では、運営に関する報告、ブラッシュアップセッションとともに、トレーナーから2012年度に改訂されたガイドブックに関する最新の情報が提供されました。

3.1 ブラッシュアップセッションの広がり

ブラッシュアップセッションでは毎回、会員から提供されたインタビュー音源を聞いて提供者の発題について話し合いを行いました。

その中で、一人の被験者に対する縦断的なインタビューの音源2本の比較し、被験者の伸びを検証して話し合う回、トレーナーのモデルインタビューの動画を視聴してインタビューの進め方について改めて確認をするという回をもちました。前者の回では、ブラッシュアップセッションで音源提供者が研究データを採集することを可能にしてはどうかという提案があり、定例会で意見交換をし、研究会として今後のブラッシュアップセッションのさらなる可能性が検討され、提案が受け入れられました。

3.2 テスター資格更新

テスター資格更新にあたって、更新期間を過ぎた場合に、その後のシンポジウムや研究会のブラッシュアップセッション参加がOPI活動として認められ、更新手続きが可能になるという情報が広がっていました。これについて、改めてトレーナーによってACTFLに問い合わせがなされました。その結果、認められないことが確認されました。

4. 今後への期待

会員が参加したくなる「魅力ある研究会」にすることを目指して、研究会の目を広

く、外に向けることを意識しました。その第1歩として、講師を招いての勉強会・ワークショップを実施しました。さらに、今後、会員外の方にも参加をしていただき、広く OPI について交流をする場として、牧野成一トレーナーによる講演会を企画し、打合せを始めました。開催は次年度以降になります。